



部落解放への道

部落差別に対する

誤った考え方

2

▼「わたしは差別していません。わたしは「部落」を絶対に差別していません。」

部落の人が勝手にひがんでいる
としか思えません。

部落の人のところへも行つて食事
もします、いっしょに酒をのむ
こともありますのに……。とい
つた話をよく聞くことがあります。

こういう人たちは「寝た子を起
すな」の項でのべましたように、
今日の部落差別というのは部落の
人たちの人間らしく生きるという
市民的な権利と自由が奪われてい
る日々の生活実態そのものが差別
であり、近代的な産業から多くの
地区住民がしめ出されていること
が部落問題の本質であることが少
しも解っていないからであります
し、部落差別を差別的なことばや
手ぶり身ぶりて侮辱することだと
考えているからなのです。

また、部落の人のところへ行つ
て食事をしたり、酒を飲んだりす

ることもあるので差別はしていな
いといっていますが、人間と人間
の交際で、ある程度親しくなれば

お互いに往き来をし、食事や酒を
共にすることはごくあたりまえの
ことです。このごくあたりまえの
ことをわざわざとりあげて酒食をと
もにするなどといっているのは、
それを意識しているとしていない
にかかわらず、部落の人を自分と
平等に考えず一段と低い者といつ
た位置づけにしているからこそ、
恩着せぬな発想からこの発言にな
るのであり、この発言そのものが
差別といえるのです。

私は差別をしませんという人
たちのなかには、部落のことにか
わり不用意な発言をすると糾弾
されたりすることもあるので敬遠
した方が無難だという意識から、
心の中にある本当のものを覆いか
くす（カムフラージュ）ためにい
う場合も多く、本心に心の底から
部落問題を認識理解したうえで信
念をもって言っている人はきわか

て少ない現状です。

したがってそのような態度は、
差別を表面には出さないが人間の
意識の中におしこんでしまう結果
となりませんので、私は差別をして
いませんといっている人こそ、ま
っ先に学習し、部落差別について
正しい認識をもつ必要があります。

▼「差別は、部落の人たちが自覚
すればなくなりはいないでしよ
うか」

部落の人たちが、あんな言葉遣
いをしたり、あんな行動や生活態
度をしているから差別されるので、
それを自覚してなおしたら誰も差
別なんかしませんよ。

部落の人たちの自覚と努力がた
りない、だから差別がなくならな
い。

もっと自力更生の意欲が必要だ
このように批判する人もありま
す、たしかにこのような批判にも
耳を傾ける必要がありますが、こ
の考え方には、現在の部落差別が
つくり出され今日までなぜ温存さ
れてきたか、根本の理由が理解さ
れておらず、差別の責任を部落住
民に背負わせた血の通わない考え
方ともいえます。

徳川時代に幕府が農民（庶民大
衆）を分裂支配し重税をとりたて、
これに反抗することをおさえる手
段としてつくられた身分制度の底

辺に位置づけられ、明治の解放令
も一片の文書による布告にとどま
り、実質的に部落の人たちが解放
された生活ができるような政策・
施策が全くなされず、日本が近代
国家としての歩みをはじめた時点
から大きな社会較差がついてきて
おり、これが部落の貧しき低さの
根源になったのです。しかもこれ
が多くの国民の心の中にある社会
意識としての差別観念に支えられ
て今日に至っているのです。

言葉遣い一つをとつても、長い
間の差別によって対外的に閉鎖さ
れた社会のなかで、地区独特の職
業構造や悪い生活環境の中から生
まれてきたものです。

地区の人々の日々の生活の仕方
や、ものの考え方、その他社会生
活のすべてにわたって見られる現
象は長い間の差別によって生みだ
され、ひろげられたものです。

こうした過去から現在にかけて
の歴史的な経過から目をそむけて
地区の人たちの自覚論や自力更生
論をぶつことは本末を転倒した考
え方ではないでしょうか。

地区の人々も部落問題について
しっかり学習し劣等感をすてて堂
々と胸を張って生きぬく自信をも
つとともに、地区外の人々も今日
の部落差別について自分自身にも
責任があることを理解してほしい
ものです。